

2024年(R6) 8月10日

発行所 石井記念友愛園
〒884-0102
宮崎県児湯郡木城町大字椎木644番地1
☎0983-32-2025 E-mail yuuaisya@kijo.jp

1000年の太平を祈る

園長 児嶋 草次郎

8月8日(木)、午後4時43分頃、地震は、高鍋の新「友愛の森」ビル南側の駐車場から、旧石井記念明倫保育園敷地内に、園長・主任と一緒にいった所で起きました。

この日、午後から都農町役場の町長・議長・福祉課長と川南役場の町長・議長・健康福祉課長あての「石井十次セミナー(8月25日)」の招待状を配り、その帰り道、友愛の森へ寄ったのです。旧園舎の解体工事にプールを含ませるか否かを判断するために確認しようと思ったのです。園長は、ヒビが入って大量の水が漏れるということで、この夏は使っていないということでした。

その時園長は「地震だ!」と言って園舎(友愛の森)の方へ主任と一緒に跳んで帰りました。本能的に「子供たちを守らねば」という気持ちが働いたのでしょう。

私は最初気がつきませんでした。酔酩(めいてい)しているような感覚から始まり、「地震」という言葉で目覚めました。家の中にいれば、物が落ちたり倒れたり、かなり騒々しくて危険な状況になりますが、庭のまん中に立っていると、不思議なほど静かでした。桜島などの爆発であれば、ドンと突き上げるような揺れですが今回の揺れはゆさゆさと言った感じで、沼の上に立っているような気持ちで木々の揺れを観察しました。一瞬、1000年前の沼のある原野に立っているような幻覚に襲われました。けっこう長く続いて振り返ると、庭で遊んでいた子供たちは庭の片隅に集まり、親鳥の羽根の中に隠れるように腰を下して保育士を中心に身を寄せ合っています。

そして、町内の拡声器から、津波警報が流れ始めると、一斉に「友愛の森」の建物の中に走って行きました。私は、駐車場の前でしゃがんでいる母子と玄関あたりでじっとしている親子に、「どうぞ中へ」と声をかけました。

新築したばかりの「友愛の森」には4階に避難所が設置されているのです。全員4階に避難したはずですが、このあたりは海拔5mくらいしかなく、10mくらいの津波が来たら、民家はほとんど飲みこまれてしまいます。次の日聞いたら、近所の人も何人か避難して来られたとのことでした。

30年以内に70~80%の確率で南海トラフ地震が来ると予想されています。マグニチュード8~9級の巨大地震になるのだそうです。後のニュースによると、震源地は日向灘でマグニチュード7.1だったそうです。南海トラフとの関連性については、その可能性が「相対的に高まっていると考えられる」とか。

私は我を取りもどすと、友愛社の方が心配になり、車をとばして帰りました。幸い、友愛社の古い建物も関連の施設それぞれ被害はなくホッとしました。油断なく今後備えていかねばなりません。

さて、今回は、「友愛の森落成式」での理事長としての挨拶に加筆し掲載させていただきます。同じことを何回も書いているような気もしますが、おそらくこの事業は100年に一度のこと。書くごとに、見えなかったことが見えるようになって来ているような気がしています。忍耐強くお付き合いください。この事業はゴールではなくスタートであり、しっかり足場を固めておきたいという気もあります。最初の挨拶とお礼の部分は省略させていただきます。

今から 1000 年ほど昔の、このあたりの風景をイメージしていただきたいと思います。今からお話しすることは、わたし児嶋の「友愛の森」物語であります。

平安時代、都（みやこ）の京都では藤原道長の全盛時代です。今、NHKテレビの大河ドラマで紫式部をやっていますが、都ではあんな感じで貴族たちはぜいたくに生活していたわけでありませぬ。しかし、あんな生活ができたのは、上級貴族で、ほんの一握りの人だけでした。

その頃、京都から遠く遠く離れたこの地では、大分の宇佐八幡宮の荘園管理と開拓のために派遣された土持一族の一派が定着し、沼地の新田開発に勤しんでいました。現在は、道路、住宅地、田畑とキッチンと整備され、一つの町として機能していますが、1000 年ほど前、このあたり一帯は、沼地であったり河原であったり、人が生活できるような所ではありませんでした。奈良時代にできた国分寺跡が西都市内にありますが、奈良の都と国分寺とをつなぐいわば国道は、西都から現在石井記念友愛社のあります茶臼原を通して木城の町に下り、都農へとつながっていました。

この「友愛の森」の一階ホールに池を作りましたが、その 1000 年前の沼をイメージするためでもあります。そのあたりの沼ではメダカも泳いでいただろうと思います。高鍋の一带は、海拔も 5 m 前後で、3 K 向こうの海からの風が海の匂いを運んでいただろうと思います。今、すぐ近くを塩田川が流れています。名前の由来を考えます。

そして、そのすぐむこうでは、豪族として成長し野武士のように精悍（せいかん）な風貌の土持一族たちが、家来や農民たちを使って開拓を行っています。沼地を水田にするやり方がある方から聞きました。資料的に裏付けされているわけではありませんが、おもしろいので紹介します。

大きな松の木を切り倒し、それらを沼地に整然と並べます。その上を枝や葉で覆い、最後に大きな石を置いて少しずつ沈め、水抜きをしていくのだそうです。堤防のない時代ですので、そのうちに川がまた氾濫して土を運んで来てくれます。夏の台風シーズンになるごとに、小丸川や宮田川は、この大地の上を龍のようにあばれ回ったのだらうと思います。

話が突然に現代に飛びます。この「友愛の森」工事が始まって、建物の基礎を作るためにユンボで土を掘ると、頭の 2 倍くらいの石がゴロゴロと出てまいりました。その多くを工事後、「明倫の小道」と名付けた遊歩道に並べましたが、残った石はまだ駐車場の奥の方に集めています。関心のある方は見てください。高鍋町立図書館の回りには、やはり同じくらいの大きさの石を積みあげ石壁としています。おそらく図書館の工事の時に出来た石ではないかと思えます。

1000 年前、多くの土工・農民たちが河原から 1 個 1 個背負って持って来たものではないかと思えます。それらを証明する記録は今のところ何もないのですが、この高鍋の町の基盤を作ったのは、このように、土持一族であることは間違いないと思えます。

1223 年頃、宮崎県各地を広く支配するようになり土持 7 頭（かしら）と呼ばれるようになった土持豪族たちの中で、高鍋（当時は財部と呼ばれていました）の土持氏は、財部土持として独立しています。

地方では武士たちがどんどん増強し弱肉強食の時代となって来ていますので、まず自分達の陣地としてお城の守りを固めるでしょう。そして町づくりを始めるのですが、大手門から 1 本東へ向けて道を抜くでしょう。家来たちに住宅地を与え、その外側に商店街が形成されていきます。その町づくりの中で忘れてならないのが、お寺や神社の建立です。特にお寺は、仏教が全国に広がった時期と重なり、武士たちの多くは鎮護と安泰のためにお寺にすがりました。一般民衆も鎮魂と平安のために仏に多くが帰依しました。土持時代の菩提寺は太平寺だったと言われています。また神社としては財部大明神社を建立した（1372）と言われています。神社は、今の八坂神社あたりだったと想像できますが、太平寺については、1 K くらい離れた所に地名として残っています。その地に土持一族のお墓の一部も発見されてい

ます。いずれ後世の人たちが何らかの史料を発見することになるのですが、私は、この現在の太平寺の場所については違和感を持っています。

太平寺は、その鎮守の杜を含めて、この「友愛の森」であるこの地にあったのではないか。財部土持が1223年頃に高鍋（財部）を本拠地と決めた頃、延岡の梶（あがた）土持は、1297年ころに延岡に井上城を築いています。その町づくりを見ると、その菩提寺（光明寺・願成寺）はやはり町の中心地にあるのです。互いに影響し合ったでしょうから、私が言っていることがピンとはずれているとも思えません。位置関係は重なるのです。

それらを前提にこの「友愛の森」事業はやらねばならない、私はそのように考えるようになりました。「太平寺」の太平は天下太平の太平であります。残されている数少ない資料を見ても、土持一族はあまり戦闘を好む集団のように感じられません。土持7頭と言われながら、戦乱の時代、伊東一族のように結束して生き残るといような戦略も感じられません。平和主義者だったのかもしれませんが。

そういう体質のせい、1457年、西都の都於郡（とのこおり）を拠点に勢力を拡大した伊東一族に滅ぼされてしまいます。下剋上の時代の戦いは悲惨なものでした。戦いに負けた一族の屋敷やお寺等は焼き払われ、首をはねられ、墓も破戒され捨てられました。織田信長だけが残虐だったわけではなく、当時の戦法はそういうものだったのです。生き残った土持一族たちは宮崎や延岡方面に逃げていったようです。そして、約230年間高鍋を治めた痕跡はほとんど残らないように抹殺されてしまいました。

伊東一族の後、薩摩、秋月と支配者は変わりますが、秋月の時代の絵地図を見ると、この空間は空地になっています。お城からも近く利用価値の高いこの土地をなぜ空地のままにしてきたのかがナゾです。

さて、色んなお導きにより、この土地に「友愛の森」事業を行なうことになりました。その内容については、年齢・障がいの有無を越えた複合・共生の福祉事業であります。コンセプトは「誰一人取り残されない家族的・福祉文化的共生地域社会づくり」として始めています。この1000年の歴史が生み出した天下太平と天と地と山川草木と人との共生の地域社会を作る試みに再び貢献することが目的でもあります。

私は、この事業を始める際、この地に負のエネルギーをすごく感じました。それを未来志向のプラスのエネルギーに転換する試みにもいくつかは挑戦しております。建物の玄関の西側にはこの地の歴史を見続けて来られたと思われる古いお地蔵さんを小さな祠（ほこら）の中に安置しました。そしてその前の石に次のように書いた「祈りと感謝」の言葉をタイルに焼きつけて貼り付けました。「中世から近世にかけて、土持・伊東・島津・秋月と、この町の支配者が変わる中で、無念の人生を送らねばならなかったすべての先人たちの、ご冥福をお祈りいたします。今まで私たちを見守って下さった、この世のおん霊に感謝し、これから未来に生きる子供たちに、静謐（せいひつ）・安寧をもたらして下さり、真の世界平和が実現するように祈念いたします。」また、今回実現できていない残された課題もあります。1000年前に祈った太平の社会を現代に再生させながら、次の世代へと引き継いでいきたいと思えます。

この試みと挑戦が今後うまくいきますように、これからも御指導・御支援くださいますように、よろしくお願い致します。天で導いてくださっています、石井十次、柿原政一郎先生、そして父児嶋虜一郎に感謝しながら、理事長としての挨拶を終わらせていただきます。ありがとうございました。